

講演「朝鮮通信使と徳川家康の平和外交」（要旨、日韓文化交流基金 NEWS73 号に掲載）

2014年12月8日

金両基氏（比較文化学者）

私と朝鮮通信使の歴史との出あいは、大学時代、東京の神田神保町、古書街であった。『臨時増刊 朝鮮號』（1910年11月刊）という日本歴史地理学会の機関誌を、たまたま本棚から手にとってページを開くと、朝鮮通信使の絵巻から転載した写真が目につき、その解説を読んだがさっぱり意味がわからなかった。

「国書を載せたる轎」の絵をみると轎の後ろに馬に乗った武人も、「屋轎上の正使」の絵姿も朝鮮王朝時代の偉い人に見えた。朝鮮王朝時代の服装で堂々と轎（輿）に乗っている人を担いでいるのは、紛れもなく日本の侍。関連する本文のページを開くと「江戸時代に於ける朝鮮使節の来朝に就いて」（藤田進）、「徳川時代初期に於ける日韓の関係」（辻善之助）という論文に出あった。朝鮮使節とはなにか、江戸時代に両国が交流していたのかと自問自答してみたが、答えが出ず、両氏論文の内容は理解出来ず本棚に戻した。

10 数年後、ソウルの古書街である仁寺洞（現在は観光の街）の古書店で、その本の写真コピー本に偶然出あった。辻・藤田の論文を立ち読みして、豊臣秀吉の武力外交、徳川家康の平和外交・平和主義といった文言に再び出あい、その本を購入した。不思議な縁を感じて韓国の大学の若い韓国史学者に朝鮮使節や国書、家康の平和外交などについて聞いてみたが、質問の意味すら理解してもらえず、答えは得られなかった。

そこで1945年8月15日の解放（光復）直後から10年ほどの間に刊行された朝鮮（韓国）史の本を開いて朝鮮通信使の単語探しを始めた。解放後の最初の自国史である崔南善の『国民朝鮮史』に、秀吉の死後、家康が朝鮮に講和を求めてきたので、宣祖王40年（1607）に国交を回復し、その後200年間平和な関係が続いたと書いている。そのくだりはたったの3行で、通信使という表現はないが、両国は200年間平和が続いた、と書いてあった。

このように、朝鮮通信使は植民地時代に歴史の表舞台から消されていたことを知り、日本の画家が画いた当時の朝鮮通信使の絵巻などを見て関心を深めていた。そして1987年、静岡県立大学赴任を期に、通信使の文化遺産を多く保存している静岡県清水市興津の清見寺を初めて訪ねた。その翌年の88年、ソウルオリンピックが開催され静岡の某テレビ局が「日韓テレビブリッジ」を企画した。コーディネータとキャスターを務めることになった私は、仮設舞台に清見寺所蔵の通信使文化遺産を映写することを提案した。提案は通ったが、当日映写はされなかった。テレビ局の現場が通信使のことを全く知らなかったので、映像を撮りに行かなかったのである。

朝鮮通信使は、家康が秀吉の侵攻による文禄・慶長の役（壬申丁酉再乱）以降、断絶状態にあった朝鮮王朝との国交回復を発信し、1607年（慶長12年）、第1回使節団が日本を往還した。一行は江戸からの帰路、家康が大御所として居城していた駿府城に招かれて大

歓待される。そういう貴重な歴史が埋もれていることを知って、東海道は朝鮮通信使の往還によって国際ロード・文化歴史ロード・芸術ロードとして発展に大きく寄与したと私は喧伝するようになった。



2007年に静岡で開催された「大御所四百年祭」で朝鮮通信使の行列が再現され、沿道の人々から盛大な拍手を受けた。

静岡県が主催する「2001年東海道400年記念事業委員会」が発足したとき、実行委員に選ばれた私は委員会で朝鮮通信使再現行列を提案した。市民団体「静岡に文化の風を」の会が支援金を得、その支援金とさらに寄付金を募って静岡で第1回目の朝鮮通信使再現行列が実現する。私が正使を、小嶋善吉静岡市長が將軍の役を任された。その後、数度再現行列を展開し、2007年に静岡県・静岡市・日本市民・在日コリアンが共同で「朝鮮通信使400周年記念事業実行委員会」を発足させ、私は実行委員長の任を務めることとなった。土曜日は駿府城で石川嘉延県知事が、翌日の日曜日は清見寺で小嶋善吉市長が將軍の役どころをそれぞれ演じた。晴天に恵まれ、大成功の聲が木霊し、韓国や県外にも、「静岡朝鮮通信使再現行列」が喧伝され定着したのである。



講師自身が時代考証をして、国書を載せた輿を再現。再現された輿を前に、清見寺内で講演を行った。

徳川家康は関ヶ原の戦いに勝った直後、秀吉の武力侵攻で断絶していた朝鮮王朝との国交回復を対馬藩主の宗義智に内々に命じ、宗義智は家康の名で朝鮮王朝に要望した。「日本朝鮮和交の事古来の道。然るを太閤一覽の後その道絶しぬ。通交は互いに両国の為なり。先ず対馬より内々書を遣わし尋ね試み、合点すべき意あらば、公儀よりの命ともうすべしとあるほどに、対馬より私かに書を渡す。」『通航一覽』

朝鮮王朝では対馬藩の再三再四の要望に、Ⅰ：(その旨の) 国書を寄こし、Ⅱ：戦争時、朝鮮王朝の王陵を盗掘した犯人を差し出し、Ⅲ：拉致した人々を帰還させる、という3つの条件を提示した。

それを受けて対馬藩は徳川家康の名を使って国書を書き、偽の犯陵を二人差し出し、拉致していた人々を多数帰還させた。朝鮮王朝は対馬藩から伝えられた国書と犯陵が偽物であることを察したが、書式や形式は整っていたのでこれを黙認し、また犯人でないと言い張る二人には「憎むなら己たちを寄こした自国(日本)を憎め」といって宣祖王が直々に裁き、犯陵は処刑された。そして日本の実情を調べるために松雲大師を正使とする使節団(探賊使)を対馬に派遣する。松雲大師は幕府の要望で1605年、伏見城に赴き大御所徳川家康と会談。二人の間に信頼関係が芽生える。そして1607年、第1回目の総勢500人からの通信使が往還し、以来徳川幕府265年間、両国の国家的摩擦はなく、平和時代が続いたのである。

私は「家康公と松雲大師の二人の出会いが通信使を生んだ」と言い、静岡の興津での再現行列でその語録を常用している。が、対馬藩が徳川家康の名で朝鮮王朝に伝えた国書は偽物であり、初期の国書も改竄されたという批判・指摘が日本側にある。家光の時代、対馬藩の内紛で、家老の柳川調興は藩主の宗義成が国書を改竄したと幕府に告発、家光が江戸城で直々に裁く。家光は「井伊尚高・土井利勝・松平信綱に命じて双方の云分を取り調べさせた。(中略) 将軍家光は三家を始め、諸大名を登城せしめ、義成と柳川とを対決せしめ、将軍自らこれを裁決した。(中略) 幕府と朝鮮の間に立って、国書を改竄し、其他種々私曲を働いていた事が、悉く暴露した。其結果、義成は許され、柳川は津軽に、方長老は南部に、呆首座は秋田に流され(中略)、これでこの一件が終わった」(「徳川時代初期に於ける日韓の関係」(辻善之助稿))

家康の名で朝鮮王朝に伝えた国書の偽造、そして改竄も江戸幕府の内部問題であり、それが両国の国際摩擦になったことはない。徳川幕府時代、両国は平和な善隣友好時代を築いたのである。

おもてなしからその様子うかがえる。神に供える神饌、最高の七五三膳・五五三膳でもてなし、駿府城で家康に歓待される前日折戸湾に豪華船を五艘遣わして家康は一行を歓待した。ユネスコの世界遺産登録にふさわしい歴史遺産である。